函館市政策アドバイザー　第１回意見交換会での主な発言内容　（別紙２）

第１回意見交換会　開催概要

１　開催日時　　令和６年８月８日（木）１５：００～１７：３０

２　会　　場　　函館国際ホテル

主な発言内容

飯村　亜紀子　氏（国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（ＮＥＤＯ）　理事）

1 空港からのアクセス，新幹線などインフラが強い。クルーズ船も大きく経済に貢献しているのではないか。医療や教育の場にも恵まれていると思う。

2 出生数が千人を切っていることである。しかし，千人だからこそ手厚く子育てを支援することも可能ではないか。

3 道南は再生可能エネルギーの資源が大変多くある。元々コンブの産地でもあるので海洋バイオマスにも強いのではないか。

4 生産性を効率化する，繋いでいくという意味で，デジタルやＩＴが有効だと思う。

伊藤　隆敏　氏（コロンビア大学国際関係・公共政策大学院教授）

5 子育て世代にとって現金給付はあまり役に立たないと言われている。それよりはサービス給付，保育所，学童保育，幼稚園等の充実，給食の無料化などで効果が上がった例がある。

6 なるべく早い時期から英語をできるようにしたり，小学校で英語のネイティブスピーカーの教員を設置基準よりもっと増やすように自治体で補助を出したりということは，子どもの数を増やすインセンティブになる。

7 財源の問題が必ず出てくるが，ホテル税，入湯税，ふるさと納税，インバウンドの利用者等から収入を得る方法があり，また，喜んで払ってもらえるような付加価値のついた高額のサービスを提供することが重要である。

8 高齢者にとっても魅力のあるまちをつくることも重要である。魅力のあるサービスやインセンティブをつけてコンパクトに住んでもらう。雪や雨に濡れずに移動できるものを作るなどは画期的で，コンパクトシティを成功させればおそらく全国的にも注目される。

9 高齢者が子育て世代の支援になるような仕組みづくりは非常に重要で，高齢者と子育て世代のつながりが出てくる。

10 若者にとって魅力のあるまちという点では，大学やその周りのコミュニティを作ることが重要である。IT人材，外国人留学生の定員を増やし，コミュニティとして成り立つようなものにしていく。

11 英語で教える授業を充実して，外国人留学生を増やし，コミュニティに若者が増えることを目指すことには非常に可能性がある。

12 陸上養殖も含め完全養殖，例えば，イカの完全養殖などを手がけていけば，函館の魅力づくりにも貢献できるのではないか。

13 新幹線の函館駅乗り入れは新幹線規格のインフラを作って民間と市で保有し，その上をJR北海道の新幹線が走り，利用料を徴収するような上下分離型がひとつ考えられる。

14 もうひとつは，駅前の不動産開発がおそらく価値が上がるので，駅周辺の開発を一体化して考え，地代を高くとったり，デパートやホテル経営したりする。外部性を内部化する。首都圏の私鉄と話をしてみてはどうか。

伊藤　正裕　氏（株式会社パワーエックス 取締役 代表執行役社長ＣＥＯ）

15 まちの混雑具合，美しさ，風光明媚なところ，資源の豊かさは極めて普遍的な価値だと思う。人口減少が進んでも，おそらく気象も変わっていくので，実は函館にとって追い風になるのではないかと感じている。

16 どこでも働ける時代になってきているので，住む環境さえ整備されれば人は選んで住んでくれると思う。頭脳労働者を誘致する政策をしてもよいのでないか。

17 函館の強みは空港である。通勤の時間帯を狙った増便，LCCの誘致で安く東京と行き来できるようにするなどが考えられる。

18 ファミリーオフィスは場所に根付いてしまえば次の世代へと繋がっていく。富裕層または超富裕層であるので，様々な人や会社が一緒に付いてくる。転入者を増やすことも出来ると思う。

19 市のレベルの話ではないが，例えば，特区を作ってファミリーオフィスが一定以上の投資を地元にすると，相続税を数年間免除する政策をすれば莫大な資本が函館に集まるのではないか。

20 国際プライベートジェットの発着枠を増やすなどすると，別荘を作ろうとする人が出てくるかもしれない。

21 子育て世代にとっては学校が課題になる。子育て世帯が非常に豊かに暮らせる支援をするとものすごく潤ってくる，循環する経済になると思う。

大西　雅之　氏（鶴雅ホールディングス株式会社 代表取締役社長）

22 函館観光の課題として，湯の川温泉がかつての状況ではなくなっていることが挙げられる。旅館個々の魅力から湯の川温泉郷の魅力に変わっていかなければならない。

23 大沼，江差，松前などの魅力をネットワークにしていく。それを具体的に函館市の強力なリーダーシップで，道南エリアの観光ビジョンを魅力的にしていく必要がある。

24 函館観光を考えたときに北東北との連携，札幌圏との連携，南北海道でまとまった魅力を作ること，この３つが重要だが，今は道南エリアが核として広がっていくことが欠落している。函館とグレーター函館をいかに魅力的にするかということに取り組むべきではないか。

25 新幹線を東京から考えるのではなく，札幌や新千歳空港からどう各エリアに伸ばしていくかという話を聞いた。札幌と函館を新幹線で結ぶのは的を射ている。

26 函館市や道南の観光地がペットのために取り組んだら，かなりの顧客層をこっちに引っ張って来られるのではないか。

27 函館はインバウンドに弱い。コナンの外国語版が実現すると，インバウンドが増えるのではないか。

隈　研吾　氏（隈研吾建築都市設計事務所　東京大学特別教授・名誉教授）

28 （函館は）あまり新しいことが起きてない観光地という感じがする。観光客は情報に敏感なので，新しいことが起きてない観光地は，ちょっとしたきっかけで観光地としての魅力がどんどん下がっていく可能性がある。

29 函館でもバルセロナのようなことが起こったら，観光地としての質が変わるのではないか。単に集客人数が急に増えるのではなくて，質が変わって見方が変わることが重要ではないか。

30 インパクトのあるものを通じて，行政の力の入れている部分をビジュアル的に見せるような仕掛けがあってもよいのではないか。

塚原　月子　氏（株式会社カレイディスト 代表取締役兼ＣＥＯ　G20 EMPOWER 日本共同代表）

31 函館を出ていって戻ってこない若者，その中でも女性の声を聞いて，どうして函館に住み続けることができないのか，戻ってくることができないのか，この原因を突き止める必要がある。

32 職場・家庭生活・社会生活におけるジェンダーギャップや世代間ギャップ，若者や女性の意識・考えを検証し，本当に取り組むべき課題が何かを考える必要がある。

33 市政でインクルージョンを掲げているところは少ないと思う。どの都市とも違って日本中や世界に誇れるインクルージョンがある市が，もしかしたらバリューになり得る可能性もある。

野村　修也　氏（中央大学法科大学院教授・弁護士）

34 日本中の方が函館を知っている。どこにあるかもよく知っている。函館がもつネームバリューはやはり活かしていかなければいけない。

35 湯治という古くからあるような概念をうまく再開発して，治療のために湯の川温泉に何泊か滞在する形のコンセプトを作り出していくことが，関係人口の可能性となる。

36 株式会社が農地を持てるようになれば，農地をもっている方々に株主になっていただくことも可能となる。そうすると，投資をする方が関係人口を作っていくことになる。

37 函館に毎年来るイベントを作るのが非常に重要だ。毎年リピーターとして来るものが作れるのではないか。

38 青森ねぶたの集客力を我々にも使わせていただくような発想があってもいい。

39 若松ふ頭のクルーズターミナルは，クルーズ船の乗客しか利用できないので，充実させ市民も遊べる施設にする可能性はある。また，港町ふ頭には施設がないので，ここをうまく充実させていけば，関係人口が増えるのではないか。

40 豪華客船を定住型のホテルに変えていただくような業者を後押しするなどにより，客船の中のカジノを楽しんでいただくような大型リゾートを作ることは不可能ではない。

41 北大水産学部が設置した地域水産業共創センターをうまく活用し，研究者が実験に来たり，企業が共同開発のために色々な方々が行き来したりすれば関係人口となる。

42 函館に来てもらう人，函館の関係人口になってもらう人，函館に定住したいと思う人などが，どのような函館だったら魅力的かをリサーチした方が良い気がする。

長谷川　榮一　氏（武蔵野大学客員教授　元内閣総理大臣補佐官）

43 人口減を食い止めるにはアプローチが大事で，まずはビジターを増やすことだと思っている。ビジターは３種類に分けて考え，これらを類型化すると函館の魅力が変わってくることを意識すべきだ。

44 企業誘致は仕事を作るので，来る方との遭遇率も広がるし，函館に戻ってくる可能性も広がる。市民になる方ももちろん出てくる。企業活動をするので，財政にも継続的に寄与する期待が高い。だが，企業側で考えている魅力と自分たちで思っている魅力と必ずしも合ってないことがあることに留意すべき。

45 函館は若者の失業率のランキングが非常に悪い。失業した若い方が事業活動，場合によっては市のサポートで技を手に持たないといけない。ハードルが低い技をつけてもらって，自分に自信を持ってもらい，そして収入を得て，誇りを持ってもらう。

46 函館市が女性の活躍するまちとして，大々的に模範になると素晴らしいインパクトがあるのではないか。

47 函館は歴史が長く，施設もあるので，近隣の市町村と一体として，展開はできるものはするということがうまくいくのではないか。

48 ペットと一緒に滞在しようとする方は，どんどん増えていることを念頭におかれるとよろしいのではないか。

丸谷　智保　氏（株式会社セコマ 代表取締役会長）

49 水産加工業・造船業などで培われている技術は貴重であるが，実は函館にまだまだそういう技術があると思う。魅力ある産業があれば若い人も集まる，あるいは定着するのではないか。

50 観光要素としての空港だけではなく，貨物便としての空港の使い方があるのではないか。

51 関係人口が増えてくると，函館はただ夜景が綺麗なだけではなく，住んでみてとても過ごしやすいこともどんどんわかっていく。関係人口を増やす中で１人２人と住民票上の人口を増やしていくような政策が，足下としてはとても良いのではないか。

52 若い人は結構起業をしており，１社の立ち上げが成功すると別な会社を同じ人が４つ位立ち上げる。経営者が別な会社を経営する，このようなことを函館に呼び込める魅力発信もとても大事だし，函館にはそういう力がある。

山崎　史郎　氏
（内閣官房参与(社会保障・人口問題）内閣官房 全世代型社会保障構築本部事務局総括事務局長）

53 都市としての競争力を高める戦略としては，函館市と周辺地域も含めた歴史遺産や自然環境，豊富な食材を活用した観光食分野は重要な柱となる。

54 函館市の安定的，持続的な発展のためには，少なくとも，もうひとつ戦略の柱が必要で，それは健康，福祉，子育て分野と考える。医療，福祉，子育てサービスでは一定の水準が確保されている。財政負担力や人材確保といった課題が存在するので，総合的かつ中長期的な視点からの検討が重要だ。